

言語能力の向上を意識した国語科と外国語科の連携の授業づくり

—言語能力の「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指して—

宮川 友梨 教職基盤形成コース 教科授業力高度化プログラム

キーワード：教科連携，言語能力，国語，外国語（英語）

1. はじめに

言語能力は「教科等を越えた全ての学習の基盤として生まれ活用される力」（文部科学省，2016，p. 27）の一つである。中でも，言葉を直接の学習対象とする国語教育と外国語教育が担う役割は極めて大きいとされており，指導する内容や方法等を連携させることが求められている（文部科学省，2016，p. 36）。国語と外国語（英語）の教員免許を持つ筆者は，国語科と外国語（英語）科の連携に興味を持った。しかし，学部生時代に行った実践の振り返りから，ただ日本語と英語を用いて授業を行っても言語能力の向上にはつながらないことに気が付いた。そこで，「言語能力の向上のための国語科と外国語科の連携」とはどのようなものであるかということテーマとして，教職大学院では実践を行ってきた。

2. 研究の背景と目的

1年次に当たる2020年度は，主に文献調査（榎木，2012；中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会言語能力の向上に関する特別チーム，2016（以下，特別チーム（2016））から国語科と外国語科の連携の意義を整理し，それを授業づくりに生かそうとした。しかし，いざ授業を構想し始めると，授業者である筆者自身の考えに紆余曲折があった（詳細は，宮川，印刷中）。そこで，思いついたものを手当たり次第授業に構想していくのではなく，連携のために必要な視点を始めに広く検討することが必要であると考え，授業のアイデアを整理するためのツールとして，「連携のフレームワーク」を作成した（図1）。

連携の意義		連携の方法	見方・考え方	指導内容	指導内容	指導方法
				Competence	Content	
(1)それぞれの教科等の学習の一層の充実						
(2)言語能力の向上	①知識・技能 メタ言語能力の育成					
	②思考力・判断力・表現力等 論理的思考力・表現力の育成					
	③学びに向かう力，人間性等 「学びの共通性」					
(3)カリキュラム・マネジメント 教師の指導力向上						

図1 連携のフレームワーク

縦軸の「連携の意義」は，連携によってどのような意義を期待するのか，連携によって生まれる学びは何かを検討するために据えた観点である。筆者は先述の文献調査によって整理した大きく3つの項目を据えた。項目は上から，「それぞれの教科等

の学習の一層の充実」，「言語能力の向上」，「カリキュラム・マネジメント 教員の指導力向上」である。2つ目の「言語能力の向上」については，特別チーム（2016）を基に3つ

に細分化した。以上の 5 つの項目から意義を整理できるようにした。横軸の「連携の方法」は、「見方・考え方」、「指導内容 (competence)」、「指導内容 (content)」、「指導方法」の 4 つの項目を据えた。「見方・考え方」は、言葉による見方・考え方と外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方の両者を授業に取り入れることであり、2020 年度の実践の振り返りから据えたものである。その他の項目は、特別チーム (2016) を参考に据えた。指導内容は、学習指導要領に記述があるような言語活動における指導事項を「指導内容 (competence)」とし、教科書の題材などの言語を通して学ぶものを「指導内容 (content)」と区別した。「指導方法」は国語科と外国語科で同じ活動を行うことである。

このようにして作成したフレームワークに基づいて、これまでに行われた連携の授業 (例秋田他, 2019) を捉えなおすと、「思考力・判断力・表現力等」の視点から連携を考えた実践は数が少ないことが分かった。また、フレームワークを作ったものの、どのように授業で活用できるのか、筆者の整理した項目は妥当であるかという検討はしていなかった。

以上のような背景から、今年度の研究課題を以下の二つに設定した。

研究課題 1：言語能力のうち「思考力・判断力・表現力等」の向上を意識して行う連携の授業とはどうあればよいか。

研究課題 2：「連携のフレームワーク」をどのように改善すればよいか。

3. 方法

2021 年度に行った授業 (中学校 3 年生の同じクラスにおいて行った実践) の省察を行う。実践 1 は 6 月 29 日～7 月 1 日に、実践 2 は 10 月 22 日～10 月 29 日に実施した。

3.1 実践 1 「俳句から広がる夏の可能性」

本実践では、国語科の授業の中に外国語科が言語活動において大切にしている「目的や場面、状況」の視点を取り入れた活動を行った。実践 1 で外国語科の授業は行っていない。

(1) 連携の意義・方法について

実践 1 では、「連携のフレームワーク」に教材研究の後に考えた活動案を書き込むことで使用した。縦軸である連携の意義が「(2)言語能力の向上 ②思考力・判断力・表現力等」で、横軸である連携の方法が「内容(competence)」に当てはまる項目を選択して、授業の方向性を固めた。外国語科では、コミュニケーションを行う「目的や場面、状況など」に応じたコミュニケーションを行うことを通して「思考力・判断力・表現力等」を育成することを目指している(文部科学省, 2017)。そこで、本実践では「目的や場面、状況(読み手)が変わったときの言葉の選び方の違い」について考えることを指導しようと決めた。

(2) 実際の授業について

3 時間の授業を 1 つの単元とした。国語科の資質・能力に加え、外国語科でねらう「思考力・判断力・表現力等」が働くような活動(単元の学習目標を、「宮川先生の俳句にアドバイスをしよう」)を構想し、実践した。

(3) まとめ

授業では、生徒にとってアドバイスを送る相手である筆者の願いと、学習した俳句の観点とを組み合わせ活動に取り組む生徒の姿があった。これにより、本実践は国語科の授業の中に外国語科でねらうような「思考力・判断力・表現力等」にかかわる資質・能力の向上も期待できることが分かった。また、今回の実践の授業づくりにおいて、連携のフレームワークを用いて筆者自身の考えの整理を行ったところ、2020 年度の実践とは異なり、惑うことなく授業を構想することができた。一方で、連携のフレームワークを使用してみたことで、横軸である「連携の方法」についてさらに検討が必要であると気が付いた。

3.2 実践2「芭蕉に学ぶ表現の工夫」

実践2では、国語科と外国語科を融合させた単元をつくるのではなく、共通する事項を両教科の言語活動に取り入れることで連携しようと考えた。また、実践1で課題とした連携のフレームワークの「連携の方法」の項目を、授業づくりを通して考えることとした。

(1) 連携の意義・方法について

今回の連携の視点としては、縦軸である連携の意義を「(2)言語能力の向上 ②思考力・判断力・表現力等」、横軸である連携の方法を「内容(competence)」と選択して、授業づくりの方向性を固めていった。今回は、単元を通して育成したいものとして、指導事項を書き入れ連携のフレームワークを使用した。

(2) 実際の授業について

実践2では、国語科の指導事項を参考に「文章の構成や表現の仕方について評価すること」を、共通する視点として両教科の言語活動に取り入れることにした。国語科では「読むこと」の活動として、「おくのほそ道」の表現の追究を行った。そのあと、外国語科では「書くこと」の活動として、読み手を意識して My great person の紹介文を書いた。

(3) まとめ

本実践では外国語の書く活動において、自分の表現にこだわって取り組む生徒が多かった。生徒が文章の工夫したい点を振り返りながら、紹介文を書く姿は国語科の指導事項であった「文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること」と深くかかわると考える。また、今回の国語の題材であった「おくのほそ道」を、表現の工夫という視点から追究することができた。以上のことから、両教科に関連する指導事項を据えることで国語科と外国語科による連携の相乗効果が期待できると考える。

4. 考察、今後の課題

4.1 研究課題1について

言語能力のうち「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指した、国語科と外国語科の連携は可能である。実践1では、相手について考えながら、俳句の知識を活用してアドバイスしようとする姿があった。これは、国語科の授業において、外国語科でねらう目的や場面、状況に応じた言語使用をしようとする姿であった。また、実践2では、読み手を意識して自分の伝えたいことを伝えるために、こんな工夫をしたいと振り返りながら紹介文

を書く姿があった。これは、外国語科の書くことの活動において、「文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること」を働かせた姿であった。このように、言語能力の「思考力・判断力・表現力等」の育成に当たっては、国語科及び外国語科で育成を目指す資質・能力を踏まえたり、それが現れる活動を構想したりする必要があると分かった。

4.2 研究課題2について

2021 年度の 2 つの実践は、連携のフレームワークを用いたため授業者の芯がぶれずに授業づくりに臨むことができた。実践2を通して、「連携の方法」の項目は、「見方・考え方」と「指導方法」が必要ないものと考えた。「見方・考え方」は、国語科と

		連携の内容	
		指導内容 Competence	指導内容 Content
連携の 意義	(1)それぞれの教科等の学習の一層の充実		
	(2)言語能力の向上	①知識・技能 メタ言語能力の育成	
		②思考力・判断力・表現力等 論理的思考力・表現力の育成	
		③学びに向かう力・人間性等 学びの共通性	
(3)カリキュラム・マネジメント 教師の指導力向上			

図2 連携のフレームワーク

ことではないと考えたため削除した。よって、この2つを削り、「連携の内容」と置いた。改めて連携のフレームワークを整理すると図2になる。

外国語科の連携の授業において、両教科の見方・考え方が働くような授業を構想することは当たり前だと考えたため削除した。「指導方法」は同じ活動を取り入れることと考えていたが、これは授業について整理する段階で考える

5. おわりに

本実践において国語科と外国語科の連携を考えることを通して、国語科や外国語科が担う役割や、言語能力とは何かについてもより深く考えることができた。この経験を、授業づくりや生徒理解に生かしていきたい。また、筆者は国語科と外国語科をつなぐ教員になりたいと考えている。今後も、両教科の連携のあり方を検討し続ける所存である。

文 献

- 秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦編 (2019).『メタ言語能力を育む文法指導－英語科と国語科の連携－』ひつじ書房.
- 文部科学省. (2016). 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）』
- 文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_010.pdf
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会言語能力の向上に関する特別チーム (2016). 『言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ（報告）』
- 宮川友梨 (印刷中). 「中学校英語の授業づくりを通じた教職大学院生の学び」『信州大学教育学部研究論集』第16号.